

江戸期の吉原遊廓における吉原細見の役割

城前 欣宏

吉原遊廓は元和 4 (1618)年に、現在の日本橋人形町にて開基された江戸幕府公認の娼地である。明暦 2 (1656)年に幕命を受けて浅草寺裏の日本堤へと移転するものの、昭和 33 (1958)年に売春防止法の施行により廃止を受けるまで 341 年に渡って営業を続けてきた。江戸唯一の遊廓であった吉原に関する資料は数多いが、その最たるものが吉原細見である。

吉原細見とは吉原遊廓の遊女を一覧することができるガイドブックである。元々は遊女評判記という遊女の品評書の付録として始まり、廓内の略図・妓楼と遊女名・揚げ代金・紋日・芸者の名・茶屋・船宿といった吉原遊廓の情報が豊富に記載されている。そのため吉原細見は吉原研究に欠かせない資料となっているが、吉原細見そのものに関する研究は少ない。また、先行研究では吉原細見の構成や出版といった「資料」としての側面しか研究されておらず、「メディア」として吉原細見が果たす役割について研究したものはない。

そのため、本研究の目的は江戸期の吉原細見を中心に、細見の利用と吉原細見のメディアとしての役割を明らかにすることである。そこで[1]「吉原細見はどこで販売されていたのか」、[2]「吉原細見は何を目的としたメディアなのか」という 2 点の問題設定を行った。特に茶屋・船宿に注目し、両者と吉原遊廓との関係性を明らかにしながら吉原細見の役割について論じた。

本研究で対象とした吉原細見は 72 点あり、ここから茶屋・船宿の数を抜き出しデータを作成した。次に江戸町触集成を用いて吉原遊廓・吉原細見・遊女・茶屋・船宿に関する町触を抜き出し年表を作成した。さらに吉原の火災年表も作成した。どちらの年表も吉原遊廓に関する通時的な事項をつかむためのものであるが、細見に記載されているデータが史実に基づく整合性を持っているか検証する資料としても使用している。また、吉原細見や吉原関連の書籍から細見の売所(販売所)となっている場所の調査も行った。

その結果、船宿の売所に関しては判明しなかったが、細見の売所として廓内の本屋売所・五十間道茶屋にある蔦屋板元本屋・田町・浅草寺・龍泉寺茶屋などを複数発見した(問題 [1])。江戸町触集成からは江戸市中では何度も私娼の摘発と、その温床である湯屋・茶屋などの取り潰しが行われていたことが分かった。その時期と吉原の火災年表の時期を、細見から作成した茶屋・船宿データと遊女人口データの増減部分に合わせると一致したことから、吉原細見の記載情報の整合性が確認できた。さらに、享保 3 (1803)年に「吉原町之外二細見と申義は有之間鋪義二付(吉原以外が細見を出してはいけない)」という町触が出されており、この点から吉原細見は江戸町奉行所公認の出版物であったと推測できる。吉原細見は毎年改訂され、妓楼ごとの遊女名を記載している。そのため、遊女の数を掌握するための人別帳として江戸町奉行所は吉原細見を利用していた可能性がある。つまり、吉原細見には高精度のガイドブックと遊女人別帳としての 2 つの目的があったと言える(問題[2])。

吉原細見と江戸町奉行所との関係性を明らかにすることが今後の課題と言えるだろう。

(指導教員 白井 哲哉)